

孤独死、6割が問題視

団地住民との繋がりを

【社】全国介護支援協議会（東京都豊島区）は11月25日、東京都港区で開催した団地における孤独死防止の取り組みに関するシンポジウムを開催した。

当日は厚生労働省社会福祉推進事業の一環として、福祉推進事業の一環として同法人が実施した「都内の最大規模集合住宅団地における孤独死の取り組みに関する調査研究」の報告を行った。この調査は東京都心に立地する光が丘パークタウン（練馬区）、高島平団地（板橋区）、白髪東アパート（墨田区）の3団地にお

ける世帯のうち、自治会・管理組合が任意抽出した3759世帯を対象にアンケート調査を実施したもので、有効回答数は2299件。

「高年齢者と地域をつなげるコーディネータ役となる人材を育てなければいけない」（練馬区光ヶ丘連合協議会・高橋司

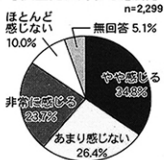
）という話題に議論が沸騰した。シンポジウムではこの結果が一つの論点となり、パネルディスカッションでは「孤立している（引きこもり型）高齢者」との繋がりが、



▲シンポジウム

「一人との繋がりを好まない人に対してもあきらめずに働きかけていかなければならない」（墨田区うめかわ高齢者支援総合センター・平原真美子氏）、「あなたのことを守っています」ということを時間をかけて伝えていく。そうすればフレンドが高齢男性でも心を開いてくれる。孤独死防止の特効薬はまだないが、知恵を絞るうちに見える」（東社協松田享子氏）などの意見がパネリストからあがった。

【孤立死に対する意識】
n=2,299



「孤立死に対する意識に ついて、「孤立死を身近な問題として感じるか」 という問いに対し、「やや感じる」が34.8%、「非常に感じる」が23.7%と約6割近い住民が孤独死について意識していることがわかった。

この結果を属性別にみると、「引きこもり型」よりも地域や人とのつな

が

が

が

が

